

〔近世――江戸時代〕

1603～1868

江戸時代、和光市域あたりは上新倉村、下新倉村、白子村（下白子村）の3つの村に分かれていました。

上新倉村の領主は板倉四郎右衛門勝重からはじまり、後に幕府直轄となり代官が支配しました。板倉勝重の息子重宗の時代になると、「荒川堤」と呼ばれる築き、暴風や大雨の際に水があふれてしまうための対策としたということが、明治20年の「上新倉村地誌」という文書に記されています。

下新倉村は、最初の領主は不明ですが、寛永年間からは酒井忠重の領地となりました。忠重は酒井家の菩提寺として壱鑑寺を建てました。その墓石の五輪塔は、和光市指定文化財に指定されています。



酒井忠重の墓（壱鑑寺）
(現在の東京都練馬区域含む)

白子村は元禄時代以後に上白子村（現在の東京都練馬区区域含む）と下白子村に分かれていますが、うち下白子村は伊賀者の給地とされていました。伊賀者が白子村を給地とした理由については、和光市指定文化財『富澤家地方文書』にある「永代地方目録」という古文書に記されています。それによれば、家康が本能寺の変に遭遇して三河に帰る際、伊賀者が道案内をしてくれたことをきっかけに、伊勢の白子にちなんで白子を給地として与えられということです。

白子村にあった白子宿は、地方遊覧の拠点となっていました。川越街道の宿場として整備された白子宿の様子は、多くの紀行文などに描かれています。

また、市域の3か村は將軍家の御鷹場でもありました。鷹場内の村々では、鷹狩りのための環境整備が求められ、えさとなる虫を献上する必要など色々な負担がありました。



白子宿（明治時代の写真）